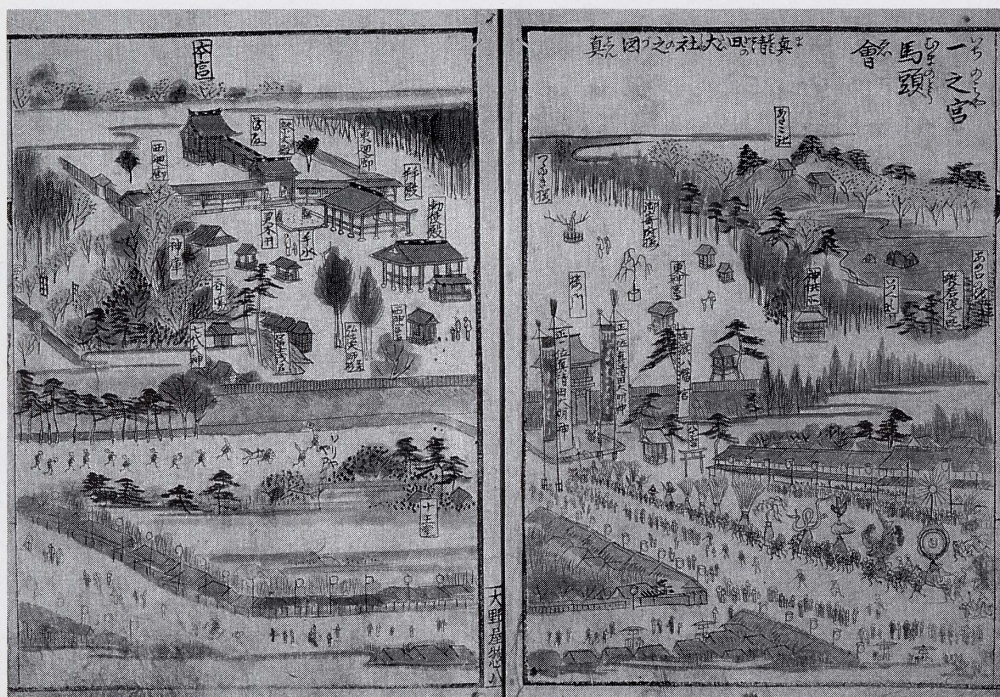


博物館だより

No. 5

企画展 「村の飾り馬具」

平成元年3月4日(土)～4月2日(日)



いちのみやうまのとうえ 一之宮馬頭会 『尾張年中行事絵抄』 東洋文庫蔵

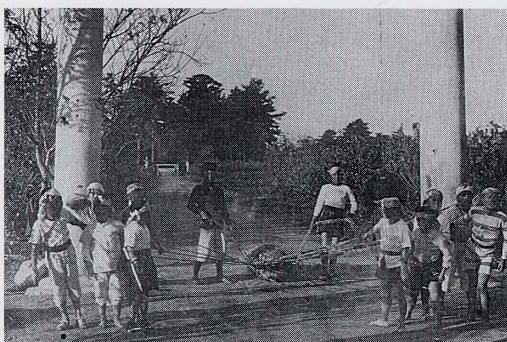
かつては尾張・西三河地方を代表する祭礼の習俗であった馬の頭(馬の塔)は、各村々の氏神祭りには欠かすことのできないものでしたが、第2次世界大戦後、各地で都市化が進む中で次第に馬そのものが姿を消し、それとともに衰退に向かって行きました。市内では現在、真清田神社の桃花祭と石刀神社の祭礼に献馬が見られるだけとなりました。

本展は、市内に残されていた飾り馬具を中心に展示し、かつての祭礼行事を振り返り、民衆の共同の文化遺産であるこれらの習俗をもう一度見直していただく機会として開催するものです。

馬の奉納

馬は人が親しんだ動物の中では最も速くて優秀な乗りものだった。そのため古来、馬と人間との関係は密接なものがあり、祭りにおいてもさかんに馬が登場してきた。

祭りに馬がみられるものとしては、神の乗り物として奉納する馬・競べ馬・流鏝馬くらやぶさめなど様々な行事があるが、神への献馬に用いられたのは実際の馬だけではなく木や土などで造られた馬形、板立馬と称する板絵、絵馬などを奉納した場合もある。特殊な例として、旧8月1日に市内浅野水法みずのりの白山社で行われる芝馬祭しばうまがある。これは芝草と藤づるでつくった馬形を氏子がひきまわし、馬に乗った白山の神が村内を巡回する神事であり、これも献馬の一種である。



芝馬祭り（大正13年）

馬の頭の起源

献馬の事を愛知県では一般に、オマント、オマントウと呼び、馬の頭・馬の塔とも記す。馬を担当した頭人（馬頭人）から来た言葉ともいわれている。鞍上に御幣や造り物を立て、飾り付けた馬を社寺に奉納する行事のことで、かつては尾張・西三河を代表する祭祀習俗のひとつであった。

馬は御輿や山車に比べれば長距離移動が可能で、より信仰圏の広い社寺への献馬を可能にしたので、特に多くの村々が連合して、特定の社寺へそれぞれの順序にしたがって行列をつくって献馬する形式がとられた。これを合宿がっしゆく・合属がっしよくといっている。5月5日の熱田神宮（名古屋市熱田区）、5月18日の大須観音（同市中区）、同日の尾張四観音といわれる荒子観音寺（同市中川区）・龍泉寺（同市守山区）・笠寺（同市南区）・甚目寺（甚目寺町）、9月9日猿投神社（豊田市）などへの献馬はその代表的存在であった。3月3日に行われた真清田

神社（一宮市）桃花祭馬の頭も広い意味での合宿（連合馬の頭）であろう。

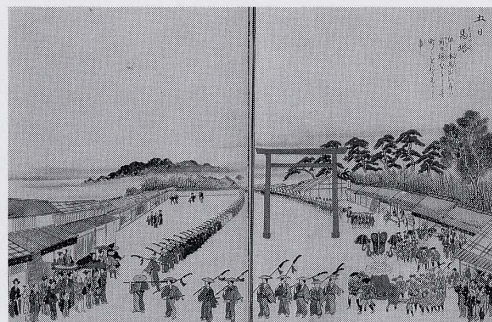
馬の頭の発生年代は正確にはわからないが、記録としては次のようなものがある。猿投神社へは天文22年（1553）に岩崎・本郷村（日進町）から馬を出して以来年々村数が増加したが、それに先立つ大永3年（1523）本郷村白山権現の祭りに献馬をしたとされる（『猿投祭礼記録』・『本郷村由緒書』）。米野木村（日進町）の猿投献馬開始は天正3年（1575）と伝えられ、それ以前の天文10年（1541）銘のある馬鞍が現存している。また『東照軍艦』には永禄7年（1564）各地から猿投祭りに馬が出されたことが見えている。

一宮市域を見ると、真清田神社の桃花祭馬の頭が、享保頃（1716—）書かれた『真清探桃集』には天正（1573—）以前から行われていたとあり、また、最近発見された市域内の馬鞍には丹陽町多加木の寛永12年（1635）銘、大和町妙興寺東市場南の寛文3年（1663）銘、今伊勢町本神戸目久井の寛文9年（1669）銘、島村法華屋敷の元禄3年（1690）銘などがあり、江戸時代の初めには各村の祭礼における献馬もその形態が整えられていったものと想像される。

熱田馬の頭

熱田神宮馬の頭は、毎年5月5日の端午たんごの節句に行われた。『塩尻』に、熱田馬の頭は、京都加茂社に見られるような競馬の式からきており、馬場の名も残っていると書かれている。熱田神宮には永禄3年（1560）銘の入った馬の頭馬具が残されている。

熱田の馬の頭は本馬と俄馬ほんうま にわかうまとに分かれていた。本馬は飾り馬として祭礼に加わるもので、村印について警固けいごの列・飾り馬が続いた。俄馬は裸馬あらごもに荒薦あらごもを巻き剣抜いを付けたもので、派手な出で立



『熱田祭奠年中行事図会』（名古屋市蓬左文庫蔵）



熱田端午馬の塔（『尾張名所図会』）

ちの人々が伴走した。天保頃には近郷の村々から約300頭にも及ぶ馬が引き出されたというが、明治の初めには行われなくなった。また、5月5日の他にも雨乞いや祈願成就のお礼などに馬の頭が行われていたと伝えられている。

馬の頭には警固役として棒の手が必ずついて、合属のおりの社寺の境内でそれぞれ自分の村の棒の手の演技が皆の前で披露されたものである。その起源は天文22年（1553）猿投神社への献馬に警固として棒の手が加わったのがはじまりとも言われている。愛知県の代表的な民俗芸能の一つで県や市の無形民俗文化財に指定されているものが多いが、棒の手については一宮市域ではその例がない。

大須観音・尾張四観音馬の頭

大須では、5月18日の観音の縁日には、名古屋城下の町をはじめ近隣の村から飾り馬が奉納された。ここでは趣向を凝らしたつくりもの、引き手の衣装も縮緬で揃えるなど特に華麗さが競われた。最盛期には植木師・芸妓連その他の職域からも参加し、その数270組を越えたという。尾張藩の歴代藩主もこれを見物したといわれるほど大勢の参加者と見物人とで賑わい、都市の祭礼として江戸時代を通して行われたが明治以降廃絶された。

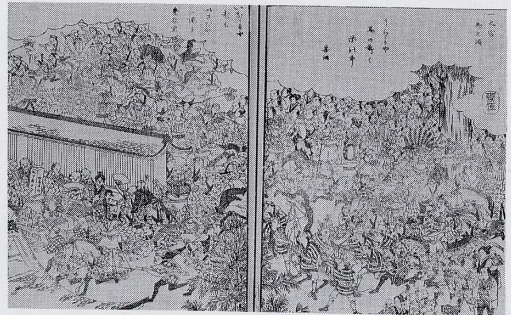


大須奉納馬の頭（『尾張名所図会』）

尾張四観音（荒子観音寺・龍泉寺・笠寺・甚目寺）でも5月18日の縁日にはそれぞれ近隣の村々から献馬が行われた。四観音はそれぞれに水に関する縁起を有し、豊作祈願・雨乞いやそのお礼の意味で行われたものと想像される。馬の飼育者の信仰があつた龍泉寺には篠木・吉根・大森の3合宿が献馬していた。昭和初期まで残っていたところもあるが今は行われていない。

桃 花 祭

だし馬（駄司馬・駄志馬、形代馬ともいう）と呼ばれる飾り馬が、妙興寺一馬（大和町）を先頭として、旧市域各町内から一定の順序にしたがって神の還御の行列に加わり、真清田神社へ奉納されるものである。現在は4月3日に行われているが、昔は3月3日の桃の節句に行われた。



一之宮馬之頭（『尾張名所図会』）

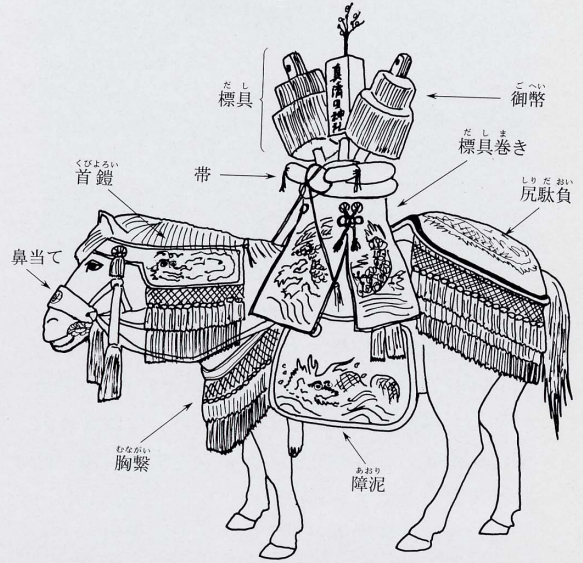
天正以前には、中島・葉栗・丹羽の各郡をはじめ春日井郡篠木・名栗村（春日井市）からも参加し、百数十頭を数えるほどであったが、寛文頃（1661-）には70~80、享保頃（1716-）には30~40頭に減っていた（『真清探桃集』）。明治以降再び隆盛を見、昭和初期には百頭近くに増えていた。現在も妙興寺及び旧市域各町内から馬が出されているが、その数は大幅に減り、馬不足も手伝ってか、馬のかわりに自動車を使うところも増えている。

真清田神社には、この他10月15日に行われる駒牽こまひき神事がある。これに出場する式馬は、かつて旧市域の町内17区より28頭、ほかに副馬として個人の心願による馬が出されたが、その数は次第に減って伊勢湾台風（昭和34年）までは30頭、現在は6連区から15頭出されるのみで、副馬は出されなくなった。この神事は翌春桃花祭の流鏝馬に用いる馬の足並み試験を行うもので、境内うちに埒を組み合わせる中で走らせるものである。

飾り馬具の名称



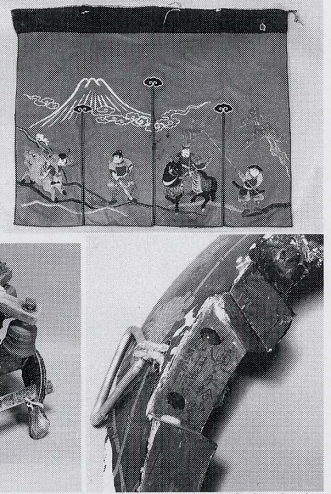
熱田の馬の搭道具 熱田神宮蔵



島村法華屋敷の標具



浅野下切の飾り馬具・鈴鞍(右)



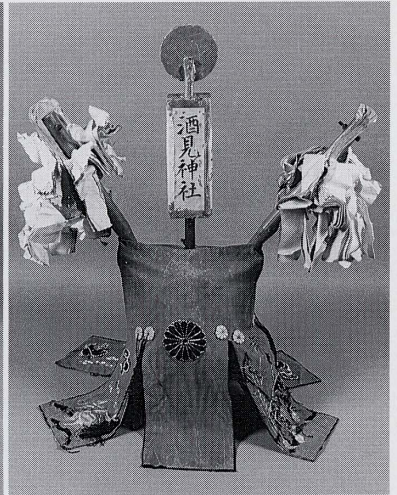
多加木の標具巻き(上)
寛永12年在銘鞍部分(下)



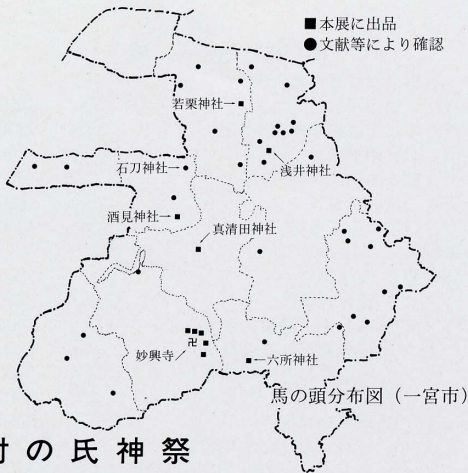
島村車屋敷の標具



島村更屋敷の標具



本神戸日久井の標具



村の氏神祭

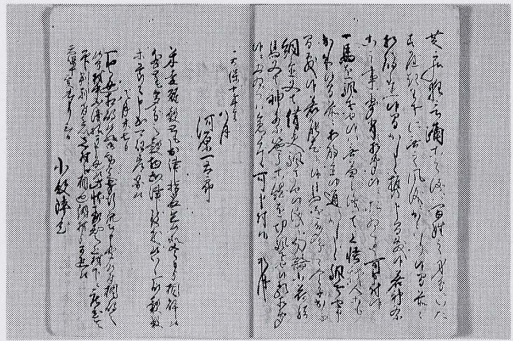
合宿の形態をとり複数の村が連合して行う馬の奉納以外に、各村では村内の氏神などに献馬することが一般的であった。村内では、だいたい各組(瀬古)ごとに馬を出していたが、明治以降には個人の馬持ちが依頼を受けて出張していった例も数多くある。飾り馬のことを花馬と呼び、笹馬ともいっていた。

村の祭りに使用される標具・馬具は、合宿のときのように格式の定められたものではなく、割竹に白い紙を束ねてはさんだ御幣を載せたものや、割竹数十本に紙花などを張り扇型に飾り付ける馬廉ばれんを載せただけのもの(馬廉は祭り終了後各農家に配られた例もある)などがあつた。一宮市域の島村若栗神社わくりしんじやの祭礼と桃花祭に使われた飾り馬具には、造り物に趣向を凝らすなど年々豪華になり、中には子供の背丈ほどもある人形を鞍の上に飾りたてたところも登場してきた。

神事や祭りに登場する馬は神の乗り物(神馬)として奉納されるか、それとも年古いとしての競馬に登場して馬場を駆けさせるかいずれかの場合が多かった。しかし、明治以降継承されてきた村の献馬の形態を見ると、飾り馬を献馬する面と馬を走らせる面の二つの性格を常に持っている。各村の祭礼では、馬を曳いて参拝した後、参道を馬の背に鈴をつけて走らせる「くま駆け馬」という駆け馬行事が行われることは頻繁に見られた。今伊勢町馬寄いわとじんじやの石刀神社の例祭(4月19日に近い日曜日)には現在も六つの瀬古から計6頭の献馬がなされ、祭りの最後に「吉田の駆けぬき」といって吉田地区の飾り馬が境内を駆け抜けて帰途につき、以下他の地区の馬が順次退出して終了する。

祭りの最後に馬を走らせるしきたりは、市域内の村々をはじめ、江南・岩倉・西春などにも同様の

例があり、おそらく献馬行事の余興として盛んに行われたものと思われる。江戸時代尾張藩の触れには、走り馬(駆馬)を規制する禁令が文政から嘉永の間に15回も出されており、駆馬は危険を伴うものであるにもかかわらず農民達特に若者の間で永く伝えられてきた。それは年古いとともて娯楽という側面をも合わせ持っていたからであろう。



駆け馬を禁ずる触れ 一天保10年8月(「中奈良文書」)

主な参考文献

- 名古屋市史民俗編 1915
- 神社に関する調査 愛知県教育史編纂部編 1931
- 一宮市史下巻 1939
- 尾張一宮の桃花祭と馬の頭(『旅と伝説』14-6) 致史堂 1941
- 一宮市史西成編 1953
- 尾張のお祭 伊奈森太郎 1957
- 一宮市浅井町史 1966
- 新編一宮市史資料編7・8・6 1967・68・70
- 官國弊社特殊神事総覧 1972
- 江南市史資料1・4 1975・83
- 桃花祭と飾り馬具 松本勝二 1977
- 稲沢市史資料編17 1977
- 猿投祭と合宿(『まつり』32) 津田豊彦 1980
- 馬の塔と棒の手 名古屋博物館 1981
- 愛知の馬具 熱田神宮官庁 1983
- 愛知の祭礼習俗 馬の塔の諸相(『名古屋博物館研究紀要』6) 田中青樹 1983
- 日進町誌本文編 1983
- 西春町史民俗編2 1984
- 馬の塔 尾張旭市教育委員会 1984
- 新編岡崎市史19 1984
- 岩倉市史 1985
- 葉栗史誌 1986
- 長久手の馬の塔と棒の手 長久手町教育委員会 1987
- 馬の頭と棒の手 日進町教育委員会 1988

謝 辞

本展開催にあたり次の方々にお世話になりました。謹んでお礼申し上げます。

青山孝三 熱田神宮 一宮市立豊島図書館 岡田芳幸 神田正春 木全修 桐原千文 櫛田菊五郎 島村車屋敷組 同更屋敷組 同法華屋敷組 多加木六所神社氏子中 田中青樹 津田豊彦 (財) 東洋文庫 名古屋市蓬左文庫 則武良昌 東浅井町内会 藤田昌宏 本神戸目久井組 真清田神社 水野正秋 妙興寺町内会・各瀬古 森高十 森与司夫 吉田修 (敬称略 50音順)

博物館日誌(抄)

(63.10.1～1.1.31)

- 9.10 企画展「有隣舎をめぐる人々—森春涛
～10.10 とゆかりの詩人展」
- 10.2 講演会「有隣舎と森春涛」
講師 一宮市文化財保護審議会委員
後藤 利光氏
- 10.22 秋季特別展「一宮の名宝(Ⅱ)」
～11.23
- 11.6 講演会「十六羅漢像をめぐる」
講師 文化庁文化財調査官
有賀 祥隆氏
- 12.17 企画展「台所の主役たち
～1.29 一かわりゆく食の道具—」
平成元
- 1.8 展示説明会
- 1.15 映画会「一宮市博物館」・「豆腐見聞
録」・「和菓子」
- 1.22 講演会「食の道具のうつりかわり」
講師 一宮市文化財保護審議会委員
脇田 雅彦氏

特別展、企画展開催中に入館者数

- ・秋季特別展「一宮の名宝(Ⅱ)」
(10月22日～11月23日) 3,754人
- ・企画展「台所の主役たち—一かわりゆく食の道具」
(12月17日～1月29日) 1,712人

お知らせ

これまで市の社会教育課文化係で取り扱ってき
ました文化財保護事業は、昭和63年10月1日から
一宮市博物館で担当しています。

また、博物館では一宮の歴史と民俗に関する本
を頒布しております。

利用案内

開館時間

午前9:30～午後5:00
(入館は午後4:30まで)

常設観覧料

区分	個人	20人以上 の団体
一般	200円	160円
高・大	100円	80円
小・中	50円	40円

(1人1回)

休館日

- 毎週月曜日
(ただし、休日にあたる場
合は翌日を休館)
- 休日の翌日
(ただし、日曜日又は休日
の場合は開館)
- 年末・年始
(12月28日→1月4日)

名鉄電車「妙興寺駅」下車徒歩5分

刊 行 物 一 覧

- 一宮市文化財調査報告書
 - 3 一宮の民俗 1000円
 - 4 池之上遺跡発掘調査報告 300円
 - 5 一宮の民家 1000円
 - 6 檜の木文化資料 400円
 - 7 一宮の民具 800円
 - 9 一宮の石造遺物 1000円
- 新編一宮市史
 - 資料編2 弥生時代 3800円
 - ” 3 浅井古墳群 2200円
 - ” 6 古代中世諸家文書集 3000円
 - ” 7 尾張藩村方御触書集上 2200円
 - ” 8 尾張藩村方御触書集下 2500円
 - ” 9 市域村絵図・近世史料集上 3000円
 - ” 10 近世史料集下 3000円
 - ” 11 銀行・会社関係資料集 2200円
 - ” 12 取引所・同業組合関係資料集 2200円
 - ” 13 産業経済資料集 2500円
 - ” 14 近代農業関係経済資料集 3000円
 - ” 15 経済統計集 2500円
 - ” 16 美術・工芸 2200円
 - 補遺1 統近代農業関係経済資料集3000円
 - ” 2 古代・中世、近世史料集 7000円
 - ” 3 近代史料集 5400円
 - ” 4 近世、近代史料集 5100円
- 本文編上 原始～明治4年 8000円
- ” 下 明治4年～ 1500円
- 年 表

催し物のご案内

◎講演会

と き：平成元年3月26日(日)午後1時30分から
と ころ：講座室

テーマ：馬と祭礼

講 師：名古屋市文化財調査委員 津田 豊彦氏

次回特別展(予定)

◎「尾張のもめん—そのルーツを求めて」(仮題)

会 期：平成元年4月28日(金)～5月28日(日)

と ころ：特別展示室

内 容：わが国最初の縮木綿といわれる松阪木綿、
それと密接な関係の知多木綿、さらに一
宮地方が直接影響を受けたと思われる美
濃縮などとの比較を通じて、一宮の縮木
綿生産のルーツを辿ろうとするものです。

一宮市博物館だより 第5号

平成元年3月4日

編集・発行 一宮市博物館

〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地

T E L 0586-46-3215

F A X 0586-46-3216